

巻 頭 言

学術委員会前委員長・東北大学大学院理学研究科
塩谷 隆

私は 2017 年 7 月から日本数学会学術委員会の委員を務めてきました。2021 年から 2 年間は委員長を務め、2023 年はオブザーバーとして参加しています。2024 年 6 月末を以て、ようやく学術委員会から離れることとなります。今回、学術委員会の前委員長として、『数学通信』に巻頭言を書くよう依頼されました。余談ですが、去年 東北大で秋の学会が行われましたが（私が大会委員長でした）、そこでの学会主催の懇親会で『数学通信』編集委員長の田口さんから直接対面でこの巻頭言への執筆依頼をいただきました。学会主催の懇親会は数年ぶりということで、コロナ禍を抜けたことを実感する素晴らしい出来事でした。

少し脱線しましたが、学術委員会についてご紹介したいと思います。とは言っても過去の委員長の巻頭言と同じような内容なので、そちらを見ていただければ十分なのですが、それでは書くことがなくなってしまうので、重複を恐れながらも書かせていただきます（「重複を恐れずに」が決まり文句ですが、私には重複を恐れずに書く勇気がありません）。日本数学会のホームページによると学術委員会は 1990 年に発足したそうですが、私の前の委員長の玉川さんが 2 年前に書いた巻頭言によると、日本数学会の前身である「東京数学会社」のときの 1880 年に学術委員会が初めて設けられたそうです。しかし、当時は現在の出版委員会、編集委員会なども兼務していたのではないかという推測が玉川さんによって述べられています。現在の学術委員会は日本数学会の学術的な活動について理事会への提言、答申、実施支援を行う委員会で、主な仕事は以下になります。

- MSJ-SI の公募、審査、運営。
- 春と秋の学会の会合における総合講演の講演者の理事会への推薦。

MSJ-SI については既に多くの皆さんはご存知かと思いますが、日本数学会からの資金援助のもとで年に 1 度開催されている大規模な研究会・勉強会です。正式名称は「日本数学会季期研究所」(MSJ - Seasonal Institute) という名前がついていますが、何故このようなエキセントリックな名前になっているかは私は知りません（研究所というと私には常設の建物ありきのように思えてなりません（批判しているわけではありません。文字数を稼ぐための戯言です））。MSJ-SI は内容的には 1 週間は講演会、もう 1 週間はレクチャー講演という形態が多かったと思いますが、特に決まりはありません。各会合の報告集が日本数学会が刊行している *Advanced Studies in Pure Mathematics* に掲載されています。

ここ数年のコロナ禍において、MSJ-SIは大きな影響を受けました。海外からの招待講演者が入国できなくなったり、対面の会合が制限されて、延期やハイブリッドでの開催を余儀なくされるなど、イレギュラーな事態が多数発生しました。組織委員の方々には次々と起こる難題に臨機応変に対応していただき、なんとか無事開催することができました。この場を借りて組織委員の皆様には厚くお礼申し上げたいと思います。

MSJ-SIでは多くの講演者を海外から招きますが、最近は学術的な重要性と共にダイバーシティへの配慮も求められるようになりました。一方で、日本数学会の資金の関係で、2024年度開催分までは1件あたり500万円だった助成金が、2025年度開催分から200万円に減額となり、規模の縮小もやむを得ない状況となっています。最近は研究集会も多くなり、皆さん忙しくなったせいも、必ずしも応募件数が多いとは言えません。これは学術委員会としては悩みの種で、改革についても議論してきましたが、これと言った良い案がなく、当面はこのまま続けることになっています。

MSJ-SIの公募は実施2年前の5月末が期限です。応募者がどのように運営してよいか分からないという場合もあり、応募を躊躇される方もおられるかと思いますが、その点については学術委員会と日本数学会事務局から色々とサポートが受けられます。まずMSJ-SIに採択されると、半年ごとに開催される学術委員会の会合へ出席してもらい、そこで実施の終了したMSJ-SIの代表者による報告、これから予定されているMSJ-SIの代表者による準備状況の説明があり、問題点や疑問点を質疑応答して、情報を共有しています。また、助成金の用途も科研費よりかなり自由度が高いです。これらは他の研究集会開催などにはないアドバンテージだと思いますが、特にコロナ禍での実施に際しての情報共有は非常に有効でした。是非、積極的にご応募くださるよう、お願い申し上げます。

学術委員会のもう一つの仕事である、総合講演についてですが、これは皆さんご存知のとおり、年2回の学会の会合で1コマずつ総合講演が行われています。学術委員会では、各分科会などからの推薦に基づいて講演者の候補を選定して理事会に推薦しています。分科会によっては、ある年に推薦して選ばれなかったら、その方は見込みがないと考えて、次の年には別の方を推薦することもあります。それはあまり良い方法ではありません。やはり、講演者として最も相応しいと分科会が考えたら、その方を数回続けて推薦した方が良いと思います。

以上、取り留めもなく書いてきましたが、還暦を迎えてなお、このような文章を書くのは苦手です。最近は目も悪くなり、完璧な文章からは程遠いかと思いますが、何卒ご容赦のほどを。